

自己評価報告書(最終報告)

報告者

生活・健康系コース(保健体育)
／乾 信之

■平成23年度の目標に対する自己点検・評価

I. 学長の定める重点目標

I-1. 教育大学教員としての授業実践

本学の目的は、豊かな教養と教育実践力をもった教員を養成し、学校現場に送り出すことにある。このことを実現するには、教科専門・教科教育・教職専門等の各分野の授業が、学校現場の実践と関連性が保たれている必要がある。あなたは、教員養成大学の教員として、本年度はどのような授業計画を立て実現しようとするのか、これまでの取り組み状況を総括し、具体的に示して欲しい。

1. 目標・計画

授業内容: 新たな内容を取り入れていく。

授業方法: 講義は発問を増やして受講生の発言を促進する。演習は課題を受講生に発表させる。実技は受講生に運営させる。

成績評価: 講義は60点をとるまで再試を繰り返す。演習と実技はパフォーマンスで評価する。

2. 点検・評価

学部の初等中等教科教育実践Ⅲでは1)子どもの遊びの変遷、2)指導要領の変遷、3)子どもスポーツの問題点を講義した。初等体育は短距離走、リレー、ハードル走で走とハードリングの中の脱力とバトンパスにおける予測を指導した。生体メカニズムと生命倫理は例年通りの内容の上に、身体イメージ形成の脳内課程を加えたので、量が多すぎてレベルが上がり過ぎた。運動学では例年通りの内容の上に、筋に振動を与えた時の身体イメージの変化を受講生に体験してもらった。新書「なぜ、歩くと脳は老いにくいのか」の読書感想文を課し、添削をした。

大学院の運動学研究は動作を伴う情報処理の観点から講義し、その演習は9月から開始し、両手同時力発揮の時、非利き手の目標値が大きいと、引き込み現象が生じる結果を得た。

II. 分野別

II-1. 教育・学生生活支援

1. 目標・計画

博士課程の院生には論文の作成を指導して研究業績の蓄積を促進する。
教職希望の学生と院生には就職を促進する指導を優先する。

2. 点検・評価

連合大学院生の論文として、“Effects of aging on control of timing and force of finger tapping” Motor Control, 15, 175-186, 2011と“Practice effects on decreasing and increasing force-control during periodic isometric movements of the index finger” Perceptual and Motor Skills, 113, 1027-1037, 2011が出版され、“Effects of force levels on error compensation in periodic bimanual isometric force production”を Journal of Motor Behavior に投稿中である。また、体育学会「両手協応課題の左右の力制御に与える力レベルの影響」とスポーツ心理学会「両手協応課題の左右の力制御に与える運動速度の影響」の発表を指導した。さらに、博士課程の院生はすでに海外の学術雑誌2篇と国内の学会誌1篇を出版しているので、日本学術振興会特別研究員 DC2に応募した。

2人の修士課程の院生は「系列反応の増加に伴って反応時間は増加する」と「両手同時力発揮に伴う力の引き込み現象」を指導し、10月の東京でのスポーツ心理学会には向学のために参加した。M2の院生は広島県高校体育の採用試験2次に不合格になったが、広島市の私学の中高一貫校に非常勤が決定した。

学部4年のゼミ生は岡山市小学校の教員採用試験に合格し、関節角度の知覚に与える筋疲労の影響を卒論として指導した。学部2年生から2名がゼミにはいり、2月から実験に加わった。

II-2. 研究

1. 目標・計画

両手の力とタイミングの制御および身体イメージ(科研費)を研究する。
研究テーマに対して、2つ以上の論文と学会発表を行う。

2. 点検・評価

科研費関連の実験「カフ圧による上肢または下肢虚血時の身体図式の知覚変化」も予想通りの実験結果が得られ、“Systematic changes in the perceived posture of the wrist and elbow during formation of a phantom hand and arm”が Experimental Brain Researchにオンラインで掲載された。また、日本神経科学大会「カフ圧による上肢虚血時の幻肢の関節角度の変化」、日本運動生理学会「カフ圧による上肢虚血時の肘と手首の姿勢の知覚変化」、スポーツ心理学会「カフ圧による上肢虚血時の肘と手首の系統的な知覚変化」を発表した。

II-3. 大学運営

1. 目標・計画

コース長としてコース運営を行う。
7月に10年経験者研修の講義と実技を予定している。

2. 点検・評価

コース長の業務に伴い、昇任人事(主査)を行った。
学術推進委員会委員を行った。

中国四国大学教育研究会の分科会の運営に参加した。

10年経験者研修の講義と実技を行った。

大学院定員充足のために、他大学の卒業生を1名確保し、他大学の卒業生1名に国語コースを紹介した。

12月のFDワークショップの司会を行った。

Ⅱ-4. 附属学校・社会との連携, 国際交流等

1. 目標・計画

国内外の学術雑誌の査読を行う。
Neuroscience Research Australiaとの共同研究を行う。

2. 点検・評価

内外の学術誌の査読を10件行った。
Neuroscience Research Australia と共同研究した身体イメージの実験“Dynamic changes in the perceived posture of the hand during ischaemic anaesthesia of the arm”が Journal of Physiology, 586, 5775-5784, 2011 の Neuroscience分野にて掲載された。
また、附属特別支援学校の実験“Adolescents with Down syndrome exhibit greater force and a delay on the onset of the tapping movement”が Perceptual and Motor Skills に受領された。
(独)日本学術振興会審査委員候補者データベースに登録された。

Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)

ゼミの学部生と院生との研究集団が形成され、教育と研究は非常に充実した年になった。